

佐藤広也「彫刻家本郷新の『わたつみの声』像通覧——断絶と継承から平和を構築するために」『立命館平和研究』11号(2010年3月)
<無辜の民>(1970年制作、15点連作)
<http://www.hongoshin-smos.jp/sculpture/mukonotami.html>

出典

クルト・ヨース(Kurt Jooss, 1901-1979) バレエ作品 The Green Table 「グリーン・テーブル」(1932年7月3日初演) <http://www.youtube.com/watch?v=IXIPDQcfXOM&feature=related>
パブロ・カザルス(Pablo Casals, 1876-1973) 『カザルス 鳥の歌 ホワイトハウス・コンサート』(1961年11月13日、ホワイトハウスで収録)(CD, Sony Classical, SICC 322)
カザルス『鳥の歌』、1971年10月24日、ニューヨーク国連総会議場での演奏 <http://www.youtube.com/watch?v=rt9iz3xApVg>
ウェスト=イースタン・ディヴァン管弦楽団 <http://www.west-eastern-divan.org/>
富山妙子『アジアを抱く——画家人生 記憶と夢』(岩波書店、2009年)
『Silenced by History: Tomiyama Taeko's Work』(現代企画室、1995年)
美術展「アトミックサンシャインの中へ——日本国平和憲法第九条下における戦後美術」 http://www.spikyart.org/atomic_sunshine/indexj.html
沖縄県立美術館検閲抗議の会編『アート・検閲、そして天皇——「アトミックサンシャイン」 in 沖縄展が隠蔽したもの』(社会評論社、2011年)
小波津正光と演芸集団FEC——沖縄の演芸集団
「お笑い米軍基地」<http://video.google.com/videoplay?docid=3028102486304230820#>
Mark Rosenthal, Anselm Kiefer, Philadelphia Museum of Art, 1987 『メランコリアー知の翼—アンゼラム・キーファー』展カタログ(セゾン美術館、1993年)
多木浩二『シジフォスの笑い——アンゼラム・キーファーの芸術』(岩波書店、1997年)

戦争を批判する芸術家、平和をつくる芸術家

これは1932年にパリで初演された『グリーン・テーブル(The Green Table)』というバレエです。[「YouTube」再生]。グリーン・テーブルは外交交渉のときに使うもので、テーブルにグリーンのカバーを掛けます。これは外交交渉の場面を揶揄したカリカチュアです。国際連盟か軍縮会議か何か、外交交渉をいろいろなポーズでやっています。銃声が聞こえました。実は戦争準備を背後でしているわけで、戦争になる、死神が出てきて……戦争の場面から、最後にあの外交交渉に戻る。空虚な外交交渉を揶揄しているんですね。このバレエは明らかな反戦バレエです。1932年、国際連盟の時期で、第1次大戦と第2次大戦の間の時期です。これは80年前の作品ですが、今見ても決して古くないと思います。これは政治的なメッセージがあるんですが、バレエ作品として大変完成度が高いものです。それが両立している好例だと思います。あと1つ、ダニエル・バレンボイム(Daniel Barenboim, 1942-)という指揮者。彼はユダヤ人で、今はイスラエル国籍です。彼とエドワード・サイードというパレスチナ人の知識人の2人が、ウェスト=イースタン・ディヴァン管弦楽団 The West-Eastern Divan Orchestra というのを作りました。これはユダヤ人とパレスチナ人とアラブ人が一緒に音楽をやるということで成功しています。イスラエル、パレスチナ問題はなかなか出口が見えませんが、彼ら芸術家の努力としては、紛争地域の若者をまとめて1つのオーケストラにしてベートーベンと一緒にやる。芸術家の持っている1つの可能性だと思います。私はこれをまさに東アジアでできているんです。東アジアは最近、音楽家の台頭が盛んですから、中国、台湾、北朝鮮、韓国、日本の若者でオーケストラをつくれるでしょう。

さて、「アトミックサンシャインの中へ——日本国平和憲法第九条下における戦後美術」という美術展がありました。これは渡辺真也というキュレーターが企画した美術展で2008年にニューヨークで開催し、翌年東京でやって、その後沖縄に持って行って、沖縄で天皇の表現をどうするかというので自主規制があつて問題になりました。この企画自体はアイデア賞ですね。私はこの美術展をニューヨークで見たんですが、野心的ですね。沖縄で問題になったのは大浦信行という富山の人の作品で、これは自画像を描いたら、昭和天皇が出てきてしまうと。あとこれはオノ・ヨーコの作品で『White Chess Set』という。チェスを全部白くしたら、どっちが敵でどっちが味方か分からなくなってしまうんですね。あと比較的平明なのは柳幸典の作品で『禁じられた箱』です。パンドラの箱か浦島太郎の箱みたいなものが下にあります。開いたら原爆のキノコ雲が出てきた。そのバックに日本国憲法が書いてあるんですよ。ここではキュレーターの役割というのが論点ですね。現代においてはキュレーターが美術を定義する。ただ日本の場合はキュレーターの地

位が確立していないので、渡辺さんのような人は大変だと思います。

さて、アンゼラム・キーファー(Anselm Kiefer, 1945-)というドイツの美術家があります。現代において一番問題提起的な、一番思索が深い人の1人だろうと思います。彼はドイツ人としてドイツの過去を背負うわけで、ナチス・ドイツを引きずらざるを得ないわけで、そこからどうするかという話です。これはインスタレーションです。これはロケットみたいなものが立っていて「復活」。ある人に言わせると彼はドイツの歴史を追体験することによって無化する、そういう克服の仕方をしていると。ドイツの戦争が原点ないし原罪としてあつて、そこからどうするかという話なんですね。

芸術とパトロン

最後にパトロンの話をします。芸術活動はパトロンなしでは成り立ちません。昔は王侯貴族です。今はパトロンが3種類あります。政府と企業と市民です。芸術家・芸術団体は、政府の補助金をもらうか、企業から大口の寄付をもらうか——ぶつう両方——します。市民は納税者として政府の補助金の出資者ですし、また多くの市民から小口の寄付を集めるのも重要です。また、昔から美術品は資産であり、投資の対象でした。昔も今も、資産家は美術品を買います。しかし資産家だけではなく、我々市民もパトロンなんです。納税者として、愛好家として。

ここで質問です。現代米国における芸術の大きなパトロンは、たとえばニューヨークのギャラリーでアート作品を買っているのは、誰でしょうか。それは、アメリカの軍需産業です。今のアメリカの主要産業は軍需産業とITなんですね。ワシントンにケネディ・センターという芸術の殿堂がありますが、ケネディ・センターのオーケストラ、ナショナル交響楽団、そこの最大のスポンサーもやっぱり軍需産業です。私としては複雑な気分になってきます。軍需産業に依存して芸術活動をすることの是非をどう考えたらよいでしょうか。藤田嗣治の戦争画とは違いますが、ミリタリーと芸術の新たな関係について考えなければいけないような気がします。そして中長期的には、軍需産業の非軍事化——軍民転換——が重要な課題となると思います。これは芸術家だけの問題ではなくて、我々すべての課題ですが。

きょうはご清聴ありがとうございました。

出典

高階秀爾『芸術のパトロンたち』(岩波新書、1997年)
福原義春『企業は文化のパトロンとなり得るか』(求龍堂、1990年)
佐々木見彦編『企業と文化の対話——メセナとは何か』(東海大学出版会、1991年)
池上惇・山田浩之編『文化経済学を学ぶ人のために』(世界思想社、1993年)
佐々木見彦『文化経済学への招待』(芙蓉書房出版、1997年)
佐々木見彦編『芸術経営学を学ぶ人のために』(世界思想社、1997年)
衛紀生『芸術文化行政と地域社会』(テアトロ、1997年)
日本芸能実演家団体協議会 <http://www.geidankyo.or.jp/top.shtml>
文化芸術振興基本法(2001年) http://www.shugiin.go.jp/itdb_housei/nsf/html/housei/15320011207148.htm